
かれんだー

amanojyaku

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かれんだー

【Nコード】

N6137C

【作者名】

amanojyaku

【あらすじ】

マンネリ化した恋の終わりはいつもすぐそこまで迫っている。それに触れるか触れないかで俺らは繋がっていたんだな。

今朝4時、レナからの電話で起こされた。

・・・何時だと思ってたんだよ。

なんだか急に怒りが込み上げてきた。

さっきまでくたくたになるまでバイトしてたつづのに。

お前がめちゃくちゃかわいい顔して欲しがってた指輪買ってやるためにさ。

ばかやるー。

で、なんの用だよ、この非常識女。

「なんだよ」

明らかに怒りが含まれている声だった。

「何怒ってるの」

「別に怒ってねえ」

「ふうん」

「で、何？」

言った直後、後悔した。

「隼人・・・」

俺の中のもう一人の俺が叫んでいる。

「なんだよ？あのさあ言いたくないけど、俺さっきまでバイトしてきて疲れてるわけ。ちよとはこっちの都合も考えろよ。だいたい誰のためにこんな必死こいてバイトしてると思ってたんだよ。お前がみんな顔して指輪見てたから・・・」

レナが電話の向こうで泣いているのがわかったが気づかないフリをした。

なんんだよ。泣けばいいとも思ってたのかよ。

「そんなもの、もう意味ないじゃない」

レナは蚊の鳴くような声で言った。

俺の小さい心臓は意味も分からずバクバク言い出した。

この根性なし。

「どーゆー意味だよ」

「隼人がいくら一生懸命バイトして指輪を買ってくれたとしても全然嬉しくないってこと」

「なんだよ、それ。そんな嫌がらせみたいなこと言うためにわざわざ電話してきたのかよ」

「・・・ほんとに疲れちゃったんだね」

「・・・は？」

「さよなら」

ツーツーツーツーツー

今日はレナの誕生日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137c/>

かれんだー

2010年10月14日19時05分発行